



平家物語の构想

—历史叙述与前兆事件—



● 平家物語の构想：歴史叙述と前兆記事

杨夫高 著

南开大学出版社

平家物語の構想——歴史叙述と前兆記事

平家物語の構想

——历史叙述与前兆事件

杨夫高 著

南开大学出版社

天津

图书在版编目(CIP)数据

《平家物语》的构想:历史叙述与前兆事件 / 杨夫高著.

—天津:南开大学出版社,2012.4

ISBN 978-7-310-03851-0

I. ①平… II. ①杨… III. ①长篇小说—小说研究—
日本—中世纪 IV. ①I313.074

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 052075 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人:孙克强

地址:天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码:300071

营销部电话:(022)23508339 23500755

营销部传真:(022)23508542 邮购部电话:(022)23502200

*

唐山天意印刷有限责任公司

全国各地新华书店经销

*

2012 年 4 月第 1 版 2012 年 4 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 8.625 印张 2 插页 201 千字

定价:18.00 元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23507125

序

楊夫高博士の前途を祝福する

新潟大学大学院 現代社会文化研究科 教授 鈴木孝庸^{たかつね}

楊夫高博士が御著書をお出しになると聞き、こころからお慶びを申し上げます。

『平家物語』は、12 世紀末の日本の政治・社会・宗教の大動乱期を記した歴史文学です。13 世紀半ばに原形ができた作品で、その後、盲目の琵琶法師によって語り広められたり、歴史書として書写されたりして、後世の人がいろいろ手を加えた結果、数多くしかも複雑な関係の異本群が誕生しました。

『平家物語』に関する研究は、17 世紀に萌芽があり、20 世紀になって本格的になりますが、^{オリジナル}原本が残されていないので、『平家物語』の最初の形は、どのようなものだったのだろうかということが、長い間の研究者の関心でした。また、西洋の文学論の影響を受けて、日本の叙事詩として文学世界を評価する議論が続きました。

今日では、いろいろな形の異本(諸本)をそれぞれ個性ある作

品と見て、各テキストごとの主題と構想を綿密に検討するという、本文批判と文学論的把握を同次元で行う研究が、もっとも基本的・正統的研究と考えられています。

楊夫高さんは、このような日本の『平家物語』研究の正統的手法を会得なさいました。楊さんは、『平家物語』の「自然描写」「自然観」の追求を出発点とし、^{かくいち}覚一本を精緻に読み解くことから、歴史叙述・構想の問題へと問題が深まり、^{えんけい}延慶本などの諸本群にも分け入って検討を進めた結果、中国の歴史叙述の在り方をお手本としながら、日本がどのように受け入れ・変化していったのかという問題に発展させました。

御新著に盛り込まれている、新見解は、次の通りです。

- ・延慶本『平家物語』は、帝王にかかわる古代の伝統的な天変観を、歴史叙述の基本に持っていることを検証したこと。

- ・延慶本の巻二から巻三にかけての叙述が、天変記事を中心に有機的に構成されていると分析したこと。

- ・延慶本において、平家ゆかりの帝王・安徳天皇を重視する視点があることを指摘し、点在する天変記事が、この点に集約されると論証したこと。

- ・覚一本『平家物語』において、天変記事が、物語の初期構想を変化させる働きを持っていると論証したこと。

- ・覚一本において、史実を改変して仕組まれた前兆記事が、物語全体の構想を覆う形となり、その結果、複合的な暗示構造が形成されていることを検証したこと。

- ・『平家物語』の諸本を見わたすと、覚一本のような達成度

に至らない様々な段階の伝本が残されていることを、具体的に確認・把握したこと。

・『平家物語』が、古代的な歴史叙述の伝統(帝王中心の)を受け継ぎながら、新しい叙述方針(新時代＝末法の到来。帝王から臣下へと視点を移す)を模索し、創造したことを論証したこと。

以上のように、楊さんの研究は、「歴史/歴史叙述」と「物語/文学」の問題を、『平家物語』を題材として具体的に論証したものです。こうした成果は、『平家物語』を始めとする日本の「軍記もの」の専門家たちにも、既に高く評価されています。

斬新な成果は、日本の古典の本文を丹念に読み込むことから始まって、必然的に中国の歴史の伝統に遡り、雄大な視野で全体を捉え直すという、御本人の思考の柔軟さと学究にかける情熱の賜物と言うべきでしょう。

本研究の価値をよく知る者として、私は、早く一書として公刊されることを待ち望んでおりましたが、まもなく実現の運びとの報に接し、感慨を新たにしました。

この書をひろく学界にお薦めするとともに、楊夫高博士がさらに大きな研究に向かって進まれんことを祈っております。

2011年12月6日

前 言

本书在 2008 年 3 月份提交给日本新潟大学的博士论文的基础上,经过修改和文字订正工作,大体上保持了博士论文的原貌。

本书以日本中世军记物语的代表作《平家物语》为主要研究对象,探讨了《平家物语》的整体构思,研究了《平家物语》等军记物语及历史文学作品中的历史事件的叙述方式和手法。

《平家物语》中描写了天变地异、怪异事件等诸多不可思议的自然现象,而这些现象作为其后发生的重大事件的前兆事件,被巧妙地穿插在作品当中。本书在对作品原文进行细致解读的同时,对大量的同时代的史料进行比较分析,在论证史实与虚构的基础上,探讨《平家物语》这部历史文学巨著在描绘平安末期的大动乱这一历史事件时,是如何进行叙述构思、如何将“历史”与“文学”统一在历史文学作品中的。

本课题的先行研究起步较晚,1950 年后逐渐受到重视,时枝诚记率先指出了天变地异现象的前兆作用。之后,生形贵重、美浓部重克、小野美典等也先后对《平家物语》中的前兆事件在作品中起到的作用进行了论证,但都是单纯的局部的原文解读,对作品中的各个天变地异事件缺乏整体把握,也没能通过版本比较分析,探讨其作为历史文学作品的构思和特性。

起源于口承文学的《平家物语》版本众多,各个版本的行文

内容存在较大差异，被划分为多个不同的体系。其中被认为是最古本的延庆本在《平家物语》研究界备受重视，最为广泛流传的觉一本被称作是《平家物语》的标准版本，文学达成度非常高。各版本中关于天变地异、怪异事件的描写有很大差异。

本研究主要运用如下方法进行研究。本书以延庆本和觉一本的研究为基础，通过对觉一本和延庆本的细致解读明确问题所在后，为了探究《平家物语》的整体构思的全貌，引入其他 11 个版本进行比较研究。并对同一时代的史料、对中国和日本古代相关的历史典籍进行大量的比较分析研究。以期明确《平家物语》作为历史文学作品的形成和发展的过程，对历史文学作品中的历史叙述方式的演变进行深入的探讨。

本研究主要围绕以下三点进行考证。

1. 对延庆本中的彗星两次出现、太白昴星犯合、天变地妖事件等进行论证，明确其构思和叙事手法。延庆本《平家物语》的第二卷和第三卷的叙述，围绕着天变事件有机地合在一起。在延庆本中，这一系列具有前兆性质的事件，既有中日史书中贯通的警戒帝王的作用，另一方面还与天皇以外的臣下的命运相连，暗示了平家灭亡的命运。可以说延庆本《平家物語》里记载的天文异常现象既有文学作品的艺术性，也兼具史书中的警戒君王的思想特征。

2. 对觉一本中的彗星出现和太白昴星犯合事件进行考证，与延庆本进行对比研究，论述两个版本在历史叙述上的差异。觉一本中的天变事件都被构思在暗示作品情节发展的重要位置，其主旨并不是天皇与国家的问题，而是将焦点集中在作品的主题及情节发展上。天变事件的历史叙述方式从

正史中的警戒帝王发展到觉一本中的预示作品主题和情节发展，而延庆本正处在这种变化的中间阶段。

3. 以觉一本为中心，对具有代表性的十三个版本中，以占卜文暗示故事情节发展的六个前兆性事件进行了研究。在觉一本中，围绕王法倾斜和平家灭亡这两个作品的主题，这些怪异事件丝丝相扣，形成了暗示的双重结构。在延庆本中，只是在与帝王问题息息相关的王法倾斜方面形成了暗示的双重结构。其他各个版本也基本上只是在其中的某一个方面形成了暗示的双重结构。从这个角度也可以探究觉一本的高度的文学性。

综合全文，本书的主要研究成果和结论如下。

延庆本中的天变地异、怪异事件等前兆事件缺乏统一构思，拥有多种历史叙述方式。这些前兆事件一方面暗示了主题构思的发展，另一方面仍然没有脱离惩戒帝王这一史书性质的历史叙述方式。虽然延庆本中已经出现了与帝王无关的崭新的天变事件历史叙述方式，但是在根本上仍未能脱离正史中的与惩戒帝王相关的视点。

觉一本中的天变地异、怪异事件等前兆事件，与王法倾斜和平家灭亡这两个作品主题有机地结合在一起，取得了文学艺术上的统一。这些前兆事件将焦点放在平家一族身上，更加紧密地体现了作品的主题和情节发展。不容否认，王法倾斜和平家灭亡这两个作品主题与帝王的命运仍然紧密地结合在一起，因此觉一本的历史叙述也并未完全脱离与帝王相关的视点，但是将重点放在作品主题上的这一崭新的历史叙述方式在觉一本里诞生了。

《平家物语》的各个版本虽然同样在叙述着平安时代末期的

重大事件——源平合战，但是由于其形成时期和各个版本侧重的主题构思的不同，相同历史事件的叙事方式存在很大的差异。从《平家物语》的形成和发展的复杂过程中，可以论证出历史叙述方式演变的一个重要侧面。

由于能力和时间的限制，本书有些观点尚欠成熟，有不少问题未能深入探讨，遗留的课题还很多。恳请各位专家读者批评指正。

まえがき

本書は、2008 年 3 月新潟大学に提出し学位を得た博士論文を基に、文字訂正や幾分の加筆を経て完成されたものである。

本書は軍記物語の代表作『平家物語』を主要研究対象とし、『平家物語』の構想を考察し、さらに軍記物語や歴史文学作品における歴史叙述のあり方について考究した。

『平家物語』において、天変地異や怪異事件などの不思議な自然現象が多く描かれ、後の大事件の前兆記事として巧みに配置されている。本書は物語本文を丁寧に読み解くと同時に、同時代の記録類との比較研究も行い、史実と虚構の問題を配慮しながら、『平家物語』が、平安時代末期の大動乱を、「歴史」として、どのように「構想」「叙述」したのか、またその「構想」「叙述」は、『平家物語』として統一的にとらえることができるのか、というような問題を論究した。

本研究課題は 20 世紀 50 年代に入ってから徐々に重視され、まず時枝誠記氏は天変地異の前兆的な役割を指摘し、後に生形貴重氏、美濃部重克氏、小野美典氏らも前兆記事の意味について論じたが、比較的近い射程内で解釈されるものが多く、作品における天変地異の記述に対する全体的な把握が少なく、異本への目配りを通して物語の在り方、あるいは歴史叙述の問題と

して論じられたことはほとんどなかった。

『平家物語』は伝本が数多く、さらに本文内容等から判断して様々な形態、系統の本が残されている。諸本によって天変地異・怪異記事の記し方が大きく異なり、それぞれに検討課題をかかえている。

本書においては主に近年特に『平家物語』研究で重要視されている延慶本と、『平家物語』の標準テキストともいえるべき覚一本を取り上げ種々の検討を加えたが、問題点を明確にした上で、『平家物語』の構想の全貌を明らかにするため、さらに他の諸本（十数本）のあり方にも言及する。同時代の記録類や中日両国の古代の史書などとの比較研究も行い、『平家物語』は歴史文学としてどのように生成されたのか、また歴史文学における歴史叙述のあり方の変遷について検討する。

本書は具体的に以下の三点をめぐって研究を進める。

1. 延慶本の天文異変記事のうち、二つの〈彗星記事〉を検討し、さらに〈太白昴星犯合〉記事と天変地妖との関わりを検討した。延慶本における天変記事は、正史における天変のような性格をもちながら、天皇ではなく、臣下の位置にある人物の運命を語る物語の展開を導くための手段の一つ・予兆的な記事として記されることが多い。「帝王鑑戒としての天変記事」と「物語の展開を予兆する天変記事」と分けて言うならば、延慶本は両者を複合させて使っているのである。

2. 覚一本に記される二つの天変記事・〈彗星出現〉〈太白昴星犯合〉を検討し、覚一本と延慶本における天変記事のあり方の相違を述べた。覚一本に記される天変記事は、物語の展開を

暗示する効果的な位置が与えられ、天子或は国家の問題より、平家一門に焦点を絞る物語の主題及び展開により深く結び付けられている。延慶本の天変記事は、中国・日本の正史などにおける「帝王鑑戒としての天変記事」から、覚一本のような「物語の展開を予兆する天変記事」へ転換していく中間に位置すると考えられる。

3. 覚一本を中心に、十三の主要諸本における〔解釈者〕が登場し解釈（すなわち占文）をする六つの天変地異・怪異事件を検討した。覚一本は、「王法の傾き」、「平家滅亡」という物語の構想に基づいて、各の異変前兆記事が緊密な関係を持ち、二重暗示構造を形成している。延慶本は、「王法の傾き」をめぐる二重暗示構造だけが覚一本以上に強調する形で成立している。その他は緊密な関係ではない。延慶本は、帝王に関わる問題を重視し、「王法の傾き」に集中しながら、歴史を叙述しようとする傾向が大きいと考えられる。他の諸本は、両者のいずれかの傾向を断片的に持つような形であると見なすことができる。

本書の結論は以下の通りである。

延慶本における天変地異・怪異記事などの前兆記事は、一元的に捉えることが出来ず、多元的なあり方を持っている。構想との関りがあると認められる記述も、それぞれ違う構想に基づいて配置されている。これらの前兆記事は、事件展開を暗示する効果的な位置を与えられながら、「帝王鑑戒」「王法の傾き」といった帝王・国家的な問題にも関わらせて記されている。延慶本においては、帝王に関わらないという「新たな歴史叙述の

在り方」が生み出されたが、中国及び日本の正史の基本である「帝王に関する視点」が根底に根強く存在していると考えられる。

覚一本に記される天変地異・怪異記事などの前兆記事は、「平家の滅亡」「末法」という物語の統一的な構想に基づいて配置され、一元的に捉えることが可能となった。これらの前兆記事は、中国及び日本の正史の基本である「帝王に関する視点」というよりも、平家一門に焦点を絞る物語の主題及び展開により深く結び付けられている。「平家の滅亡」「末法」という物語の構想は帝王の問題にも大きく関わることからみれば、覚一本における歴史叙述は「帝王に関する視点」から完全に離れてはいないが、より物語の構想に基づいて展開を暗示する「新たな歴史叙述のあり方」となっているのである。

平安時代末期の大事件を同じ範囲で素材とし、「平家物語」と、書名も同一の書でありながら、その「歴史」の記し方には、大きな差異が認められるということである。そして、大づかみに古代の歴史叙述の流れから言えば、平家物語の段階に至って、新たな叙述法が生み出されたということになるのである。

本書の研究課題に関して、まだまだ多くの問題点が残されている。皆様のご鞭撻をいただき、これからの課題とさせていただきます。

目次

序章 研究史的考察	1
はじめに	2
第一節 平家物語の研究史概観	8
第二節 主題と構想に関する研究史	
一本研究における問題の所在一	20
使用テキスト及び主要注釈書一覧	49
第一章 古代における天文異変の認識	53
はじめに	54
第一節 中国における受け止め方	56
第二節 日本における受け止め方	58
第三節 平家物語以外の文学作品における天変記事	60
おわりに	63
第二章 延慶本の〈彗星記事〉と歴史叙述	67
はじめに	68
第一節 延慶本における天変記事の概観	70
第二節 二つの〈彗星記事〉について	73
第三節 彗星①について	79
第四節 彗星②について	84
おわりに	93

第三章 延慶本の構想と天変記事	99
はじめに	100
第一節 〈太白昴星犯合〉記事について	103
第二節 〈太白昴星犯合〉記事群の引用故事について	112
第三節 天変地妖②について	119
第四節 天変地妖④について	124
おわりに 延慶本における天変記事の性格	126
第四章 諸本における天変記事の性格変化	134
はじめに	135
第一節 覚一本平家物語に記される二つの天変	136
第二節 覚一本における天変記事のあり方	141
第三節 諸本の天変記事の概観	152
第四節 物語における天変記述の性格	156
おわりに	159
第五章 覚一本における「暗示の二重構造」	169
はじめに	170
第一節 覚一本における前兆記事	172
第二節 《B辻風》における時間の改変	182
第三節 《B辻風》の暗示範囲	186
第四節 《B辻風》と〈A C D E F〉との暗示関係	190
おわりに	193
第六章 諸本における二重暗示構造	196
はじめに	197

第一節 〈B—C D〉との対応関係が不完全なグループ..	200
第二節 〈B—E F〉との対応関係が不完全なグループ..	203
第三節 二重の暗示構造が形成されないグループ	213
第四節 二重暗示構造の構想	216
おわりに.....	223
終章 平家物語と歴史	226
参考文献一覧	234